

広島市における感染症発生動向調査結果について (2013年)

生活科学部

はじめに

広島市では、広島市感染症発生動向調査事業実施要綱に基づき、衛生研究所に感染症情報センターを設置し、市域の感染症情報を集計、解析するとともに、その結果をホームページ等により、市民、関係機関等へ提供している。

今回、2013年の広島市における感染症患者発生状況をまとめたので報告する。

方法

1 対象疾患

対象疾患は、国の実施要綱に示されている一類感染症(エボラ出血熱等7疾患)、二類感染症(急性灰白髄炎等5疾患)、三類感染症(コレラ等5疾患)、四類感染症(E型肝炎等43疾患)、全数把握対象の五類感染症(アメーバ赤痢等18疾患)および定点把握対象の五類感染症(インフルエンザ等26疾患)の合わせて104疾患とした。

2 患者情報の収集

全数把握対象の感染症については市内医療機関から、定点把握対象の五類感染症については定点医療機関から週単位または月単位で、各行政区に置かれている保健センターに届出される。各保健センターは、感染症発生動向調査システムにより患者情報を感染症情報センターへ報告し、感染症情報センターでは中央感染症情報センター(国立感染症研究所)へ全市分の患者情報を報告するとともに集計処理を行った。

なお、市内の患者定点の内訳は、インフルエンザ定点(小児科定点を含む)37、小児科定点24、眼科定点8、性感染症定点9、基幹定点7である。

3 対象期間

全数把握対象疾患および月報対象の定点把握対象疾患については、平成25年1月1日～12月31日とし、週報対象の定点把握疾患は、平成24年12月31日～平成25年12月29日(2013年第1週～第52週)とした。

結果

1 全数把握対象疾患

医療機関から届出のあった疾患は、二類感染症

は結核、三類感染症はコレラ、細菌性赤痢、腸管出血性大腸菌感染症、腸チフスの4疾患、四類感染症はA型肝炎、つつが虫病、デング熱、日本紅斑熱、レジオネラ症の5疾患、五類感染症はアメーバ赤痢、ウイルス性肝炎、クロイツフェルト・ヤコブ病、劇症型溶血性レンサ球菌感染症、後天性免疫不全症候群、ジアルジア症、侵襲性髄膜炎菌感染症、侵襲性肺炎球菌感染症、梅毒、破傷風、風しん、麻しんの12疾患で、合わせて22疾患であった。一類感染症については届出がなかった。2013年における各疾患の届出数を表1に示した。比較的届出数の多かった疾患(結核を除く)は次のとおりである。

(1) 腸管出血性大腸菌感染症

22件の届出があり、前年の14件から増加した。これらはすべて散发事例であった。月別では、9月が7件と最も多く、6月から9月の4か月間に19件の届出があった。血清型別では、O26が10件と最も多く、次いでO157が7件、O165が3件であった。年齢別では、20歳未満が50%を占めていた。

表1 全数把握対象疾患の届出数(2013年)

類型	疾患名	届出数
二類	結核	195
三類	コレラ	1
	細菌性赤痢	1
	腸管出血性大腸菌感染症	22
	腸チフス	1
四類	A型肝炎	11
	つつが虫病	8
	デング熱	2
	日本紅斑熱	3
五類	レジオネラ症	9
	アメーバ赤痢	10
	ウイルス性肝炎	11
	クロイツフェルト・ヤコブ病	5
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2
	後天性免疫不全症候群	26
	ジアルジア症	1
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1
	侵襲性肺炎球菌感染症	3
	梅毒	7
破傷風	1	
風しん	35	
麻しん	1	

(2) 後天性免疫不全症候群

26件の届出があり、前年の18件から増加し、これまでの年間届出数の最高値(2009年の25件)を上回った。このうち、エイズ患者が10件、HIV感染者が16件であった。

性別は、すべて男性であった。年齢別にみると、20歳代から40歳代が多く、この年齢層が22件と85%を占めていた。感染経路は、性行為によるものが25件とほとんどを占めており、同性間が17件、異性間が8件であった。

(3) 風しん

35件の届出があり、全数把握対象疾患となった2008年以降で最も多かった。月別では、6月が13件と最も多く、4月から6月に25件と春季に多かった。性別では、男性が24件と69%を、年齢別では、20歳代から40歳代が27件と77%を占め、成人男性の患者の割合が多かった。

2 定点把握対象五類感染症

(1) 週単位報告疾患

インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点および基幹定点から毎週報告される18疾患の報告数を表2に示した。年間の定点当たり累積報告数は、感染性胃腸炎の383人が最も多く、続いてインフルエンザ317人、手足口病103人、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎56.4人、水痘56.0人、流行性角結膜炎45.5人、咽頭結膜熱44.7人、突発性発しん23.7人、RSウイルス感染症22.9人、流行性耳下腺炎14.7人、ヘルパンギーナ14.6人などとなっている。年間の推移に特徴が認められたインフルエンザ、咽頭結膜熱、感染性胃腸炎および手足口病について、広島市と全国における週別の定点当たり報告数の推移を図に示した。

a インフルエンザ

年間の定点当たり累積報告数は317人で、前年の184人と比べ前年比1.72と増加した。

2012/13シーズンは、2012年第51週に定点当たり1.57人と流行期に入った。その後2013年第2週から急増し、第4週に定点当たり50.6人と3シーズンぶりに警報レベル(定点当たり30.0人)を超えピークとなった。その後第6週まで警報レベルを上回った状態で推移した。第7週から第10週は定点当たり25人前後で推移した後、第11週以降は減少し、第19週には定点当たり0.78人とほぼ終息状態となった。

b 咽頭結膜熱

年間の定点当たり累積報告数は44.7人で、前年

の13.9人と比べ前年比3.22と大きく増加した。年間の累積報告数は、小児科定点患者総数の6.2%で、小児科定点報告対象疾患のうち5番目に多かった。6月より急増し、第24週に定点当たり2.38人とピークを迎えた後は緩やかに減少したが、10月中旬より再び増加し、例年に比べ流行期間が長かった。

c 感染性胃腸炎

年間の定点当たり累積報告数は383人で、前年の411人と比べ前年比0.93とほぼ同程度であった。年間の累積報告数は、小児科定点患者総数の53.1%を占め、小児科定点報告対象疾患の中で最も多かった。

第2週に定点当たり15.3人のピークを迎えた後は減少したが、4月から再び増加し定点当たり10人前後で推移した。6月以降は減少傾向となり、7月～10月は低い水準であった。11月から再び増加が始まり、第51週に定点当たり15.7人のピークを迎えた。

d 手足口病

年間の定点当たり累積報告数は103人で、前年の3.99人と比べ前年比25.7と大きく増加した。年間の累積報告数は、小児科定点患者総数の14.2%で、小児科定点報告対象疾患のうち2番目に多かった。

5月より増加が始まり、第28週に定点当たり12.0人のピークを迎えた。以後は減少し、第39週に定点当たり1人未満となりほぼ終息した。

(2) 月単位報告疾患

月単位で報告される定点把握五類感染症(性感染症定点から報告される性感染症4疾患および基幹定点から報告される薬剤耐性菌感染症4疾患)の報告数を表3に示した。

a 性感染症

性感染症4疾患のうち、年間の定点当たり累積報告数が最も多かったものは、性器クラミジア感染症の33.4人で、次いで淋菌感染症の23.4人であった。性器ヘルペスウイルス感染症と尖圭コンジローマを加えた性感染症4疾患の総数は、前年比1.12とやや増加した。

b 薬剤耐性菌感染症

年間の定点当たり累積報告数は、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症が62.6人と最も多く、次いでペニシリン耐性肺炎球菌感染症2.00人、薬剤耐性緑膿菌感染症0.71人の順であった。薬剤耐性菌感染症4疾患の総数は、前年比0.87とやや減少した。

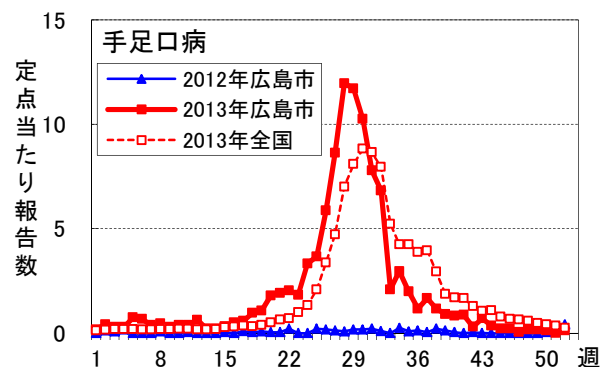
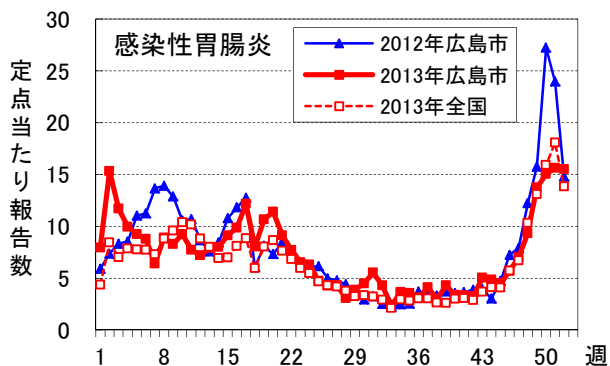
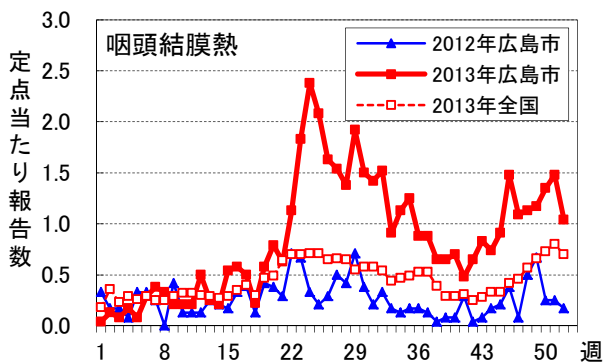
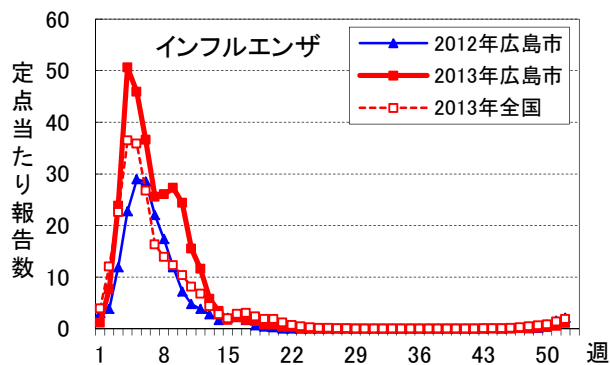


図 定点当たり報告数の週別推移

表 2 定点把握対象五類感染症患者報告数
(週単位報告分) (2013年)

疾患名	報告数
インフルエンザ	11,709 (317)
咽頭結膜熱	1,053 (44.7)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1,335 (56.4)
感染性胃腸炎	9,062 (383)
水痘	1,320 (56.0)
手足口病	2,445 (103)
伝染性紅斑	25 (1.02)
突発性発しん	560 (23.7)
百日咳	29 (1.19)
ヘルパンギーナ	345 (14.6)
流行性耳下腺炎	345 (14.7)
RSウイルス感染症	535 (22.9)
急性出血性結膜炎	16 (2.04)
流行性角結膜炎	363 (45.5)
細菌性髄膜炎	11 (1.56)
無菌性髄膜炎	69 (9.87)
マイコプラズマ肺炎	37 (5.29)
クラミジア肺炎(オウム病を除く)	0 (0.00)
感染性胃腸炎 (病原体がロタウイルスであるものに限る。)	2 (0.28)

()内は定点当たり累積報告数

表 3 定点把握対象五類感染症患者報告数
(月単位報告分) (2013年)

疾患名	報告数
性器クラミジア感染症	295 (33.4)
性器ヘルペスウイルス感染症	104 (11.6)
尖圭コンジローマ	99 (11.3)
淋菌感染症	208 (23.4)
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌 感染症	438 (62.6)
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	14 (2.00)
薬剤耐性アシネトバクター感染症	1 (0.14)
薬剤耐性緑膿菌感染症	5 (0.71)

()内は定点当たり累積報告数